

ピューリタンと火薬陰謀事件説教

— John Strickland の火薬陰謀事件説教における “God’s presence” と “Deliverance” —

高 橋 正 平

序

1605年11月5日のジェームズ一世の殺害を狙った火薬陰謀事件以来イギリスでは事件糾弾の説教がジェームズ一世擁護派説教家によって数多く行われた。いわゆるピューリタン革命までイギリスにおける火薬陰謀事件説教はもっぱら William Barlowe, Lancelot Andrewes, John Donne 等英国国教会に属する説教家によって行われていた。それら体制派説教家によるすべての説教は当然のことながら火薬陰謀事件と事件を引き起こしたジェズイット（カトリック教徒）を激しく非難し、合わせて事件解決に大きく貢献したジェームズ一世と王の事件からの奇跡的脱出賞賛で終わっている。ところが17世紀も半ばを迎え、ピューリタンが宗教的にも政治的にも主導権を得、ジェームズ一世の息子のチャールズ一世と激しく対立していく。両派の対立が激化していくなか1644年11月5日ピューリタン説教家によって火薬陰謀事件記念説教が4編行われた。1644年と言えば1642年8月に革命が勃発して2年を経過した年である。その1644年11月5日にピューリタンによる火薬陰謀事件説教が4編も行われるのは異例であり、注目を要する。過去同一日に4編もの火薬陰謀事件説教が行われた例はない。その4人の説教家は John Strickland, William Spurstowe, Anthony Burges, Charles Herle である。本論文ではそのうちの John Strickland の説教に焦点をあて、その説教の解明にあたる。ピューリタン革命が始まると英国国教会派説教家による火薬陰謀事件説教はほとんど行われず、もっぱらピューリタン説教家によって火薬陰謀事件説教が行われることになる。これは国王軍との戦いが影響していると思われる。なぜ英国国教会派の説教家による火薬陰謀事件説教が激減した

のかは疑問である。ピューリタンが英国国教会派説教家に説教を禁じたということではない。ピューリタン革命前までの英国国教会派説教家による説教には一定の説教の手順があり、英国国教会派説教家のほとんどはその手順に従って説教を行っていた。ところがピューリタンの説教をみると彼らはその手順を踏襲していないことがわかる。英国国教会派の説教で最も大々的に扱われるテーマは火薬陰謀事件の最大の被害者となるはずだったジェームズ一世である。英国国教会派説教家はこぞって神の慈悲による（と彼らは見なしたが）ジェームズ一世の奇跡的救出を賞賛し、ジェームズ一世ひいてはイギリス国民への神の特別な配慮に最大の賛辞を送った。ジェームズ一世の事件からの奇跡的救出を機にイギリス人は神から特別に選ばれた国民であるという「選民」意識を説教家は国民に植え付けた。ところがピューリタン Strickland の説教には火薬陰謀事件への言及は2回だけで、ジェームズ一世への言及は全くない。これは何を物語っているのか。それはピューリタンの火薬陰謀事件説教の目的は火薬陰謀事件を論じることよりも他にあったことを示している。本論では1644年11月5日に行われた Strickland の説教を取り上げ、英国国教会派説教家との比較のなかで、Strickland の説教の真意はどこにあったのかを中心にして論じていく。その真意の解明はピューリタン革命時においてピューリタンが直面していた問題の解明にも通じるが、Strickland の説教は火薬陰謀事件を扱う一方で議会軍と国王軍との戦いのなかで議会軍を援護する説教でもあったことを中心にして論を進めていく。

1. John Strickland (1601-1670) の説教

Strickland は元々は Salisbury 出身で、Westminster 聖職者代表者の一人である。オックスフォードで学び、早くからピューリタンの気質で知られ、内乱中は議会軍に加担していた。彼は議会軍に説教をするよう度々要請されるが、それは彼らを王制打倒へと鼓舞するためであった。彼は契約主義者で、王党派からは不興を買っていた。一時ロンドンで過ごした後、彼は Salisbury の St. Edmund 教会の聖職者になった。彼の聖書解釈は特に衆目の一致するところと

なり、ピューリタン聖職者として名をなすようになる。ピューリタンとして Strickland は礼拝統一令によって要求された誓いをたてることを拒否し、1662年には教会から追放されている。投獄の経験もあったが、最後までその信念を貫く。Strickland は1644年11月5日上院で火薬陰謀事件説教を行う。革命勃発後2年が経過していたが、あえて革命進行中のなかで Strickland が火薬陰謀事件説教を行う意図はどこにあったのか。彼の説教はこれまでのジェームズ一世支持派の説教家による説教とはその内容が大いに異なっていることに我々はまず注目せざるをえない。いかなる点で Strickland の説教は従来の説教と異なっているのか。以下本章では Strickland の説教がどのような内容を持つ説教であるのか、その説教の特徴を明らかにしていくことから論を進めていくことにする。

2. 火薬陰謀事件説教としての Strickland の説教

1605年11月5日の火薬陰謀事件以来、英国国教会派の説教家による事件糾弾の説教が次々と行われることになった。従来英国国教会の説教家による火薬陰謀事件説教は以下の手順に従って行われていた。(1)火薬陰謀事件と類似した事件を聖書から選ぶ。(2)いかに事件が凶悪であったかを述べる。(3)いかにジェームズ一世が奇跡的に事件から救出されたか。(4)(1)で選んだ聖書の一節を事件に適応する。(5)事件を未然に防いだジェームズ一世への賞賛。(6)ジェームズ一世を救出してくれた神への感謝。これが英国国教会の説教家による説教の手順であった。ところが Strickland の火薬陰謀事件説教は以上の手順に従ってはいない。11月5日の火薬陰謀事件記念説教の性格から言っても、当然事件を大々的に取り上げて論じるのを我々は期待するが、その期待は裏切られる。火薬陰謀事件への言及が皆無かと言えばそうではなく確かに火薬陰謀事件への言及はある。例えば、火薬陰謀事件について Strickland は次のように言う。

This day [15 November] puts us in mind of another, never to be forgotten, deliverance from popish treachery, more admirable than the former [Spanish Armada's invasion of

England in 1588], which was from open violence; of which we may say...our danger was the greater in the powder treason, because secrecy made the blow more unavoidable, and had not been discovered but by the eye of heaven: it was a treachery that wants a name to expresse it, unlesse you will call it (as one doth) by the name of a *Catholique villany*. Learned endeavours have been made to finde a parallel in former Histories, buit this deliverance stands alone & is a *None-such*⁽¹⁾.

Strickland の火薬陰謀事件への言及で上記の説教手順に合致するのは、事件が過去の歴史において比較する事件がないという（2）だけである。興味あるのは事件が「天の目」以外には発見されなかったという表現である。英国国教会派の説教家だったら「天の目」とは言わず、ジェームズ一世と言ったであろうが、Strickland は意図的にジェームズ一世という表現を避けている。これ以外に Strickland が火薬陰謀事件に言及するのは1回のみである。それは、“how many infernall conspiracies (well-nigh as dark and deep as the Powder-treason) have been lately defeated?”⁽²⁾に見られるが、「火薬陰謀反逆事件とほとんど同じくらい邪悪で凶悪な」という表現は上記の引用文の事件の説明と変わらない。このように Strickland は火薬陰謀事件には2回言及するだけである。上記の説教の手順に関する項目でも（1）の聖書からの火薬陰謀事件と類似した一節の選択も事件を論じるには不十分である。Strickland が説教に選んだ聖書の一節は「詩篇」46章7節からの“The Lord of Hosts is with us, the God of Iecob is our refuge.”である。この「万軍の主がわれらと共にいる、ヤコブの神はわれらの避け所である」では、神がイスラエル人にとっていかに身近な存在であるか、またいかに神が彼らを助けてくれるかを述べているが、Strickland はこの一節を火薬陰謀事件へ適応することはない。この一節では火薬陰謀事件と類似した事件は記されていない。従来の英国国教会派の説教では危機に直面した人物が奇跡的に救助される一節を説教の主題とし、それを事件からのジェームズ一世救出に適応する。ところが Strickland の説教で冒頭にあげた「詩篇」46章7節からは劇的な人物の救出は描かれていない。だから聖書の火薬陰謀事件への適応は行われないのである。Strickland は説教で主として旧約聖書から多くを引用している

が、そのなかに「詩篇」124章2-3節と6-7節からの以下の一節がある。

If it had not been the Lord, who was on our side, now may England say, if it had not been the Lord, who was on our side, when men rose up against us, then they had swallowed us up quick: but blessed be the Lord, who hath not given us as a prey unto their teeth: Our soule is escaped as a bird out of the snare of the fowler, the snare is broken, and we are all delivered⁽³⁾.

この一節は主がイスラエルの滅亡を図った敵から助けてくれたことに対して主の恵みに感謝したものである。本来ならば「詩篇」46章7節よりもこの一節が火薬陰謀事件日にはふさわしい。主が我らの側にあったら我らは敵から滅ぼされることはない。わなからのがれた鳥のように我らは救出された、とあるが、これを火薬陰謀事件に適応することは難しいことではない。火薬陰謀事件はまさしく「ひとびとがわれらに逆らって立ちあがった」事件で、「ひとびと」は火薬陰謀事件を計画したジェズイットであり、「われら」はジェームズ一世となる。火薬陰謀事件では国会臨席のジェームズ一世を初め政府の要人が「わな」にかけられ、そのわなから主の助けにより救出されたのである。事件に気づいたジェームズ一世は「主」である。しかも“now may England say”は聖書では“now may Israel say”と書かれており、Stricklandはわざわざ“Israel”を“England”に変えている。これはStricklandが「詩篇」124章2-3節と6-7節を意図的にStricklandの時代のイギリスに適応しようとする姿勢を示している。このように「詩篇」124章2-3節と6-7節から火薬陰謀事件を糾弾する説教を行うことはたやすい。敵の歯にえじきとして手渡すことをしなかった主の恵みへの感謝は従来の説教と同様の説教になる。ただ敵のイスラエルへの攻撃がどのようなものかについて具体的な描写がなく攻撃の凶悪さへの言及がないことはイスラエルの奇跡的な救出を幾分劇的にならしめていないという欠点はあるが、「詩篇」124章2-3節と6-7節は「詩篇」46章7節よりは火薬陰謀事件日によりふさわしい一節となっている。Stricklandは説教の後半でも本来の火薬陰謀事件説教にふさわしい一節を「エステル記」4章14節を挙げている⁽⁴⁾。クセルクセス一世の宰相ハマンは

民族の敵ユダヤ人殺害を計画するがハマンは失敗し、ユダヤ人は解放される内容である。この事件は火薬陰謀事件に適応すればユダヤ人→ジェームズ一世、ハマ→ジェズイット、という図式が成立する。しかもハマンは処刑されることになるので、火薬陰謀事件の説教にはふさわしい一節である。このように Strickland は火薬陰謀事件に類似した事件を説教で取り上げるが、それを説教の主題とはしない。類似した事件を選べば、ジェームズ一世の賞賛につながるからであるが、それは窮地に陥ったピューリタンの救出にも適応できる。Strickland は説教で火薬陰謀事件にはほとんど言及せず、彼の説教を英国国教会派の説教家の説教と比べると従来の火薬陰謀事件記念説教の手順を踏んでいないことがわかる。もう一つ英国国教会派説教家の火薬陰謀事件説教と Strickland の説教を比較すると Strickland の説教にジェームズ一世賞賛が皆無であるという特徴を指摘することができる。Barlow, Lancelot, Donne 等英国国教会派説教家は追従とも思われるほどジェームズ一世を激賞した。それは一つにはジェームズ一世が事件直後の国会演説で事件の批判をするようにと説教家に訴えたからで、各説教家はあわよくば王の目にかない、要職を得るチャンスを得ようとしたからである⁽⁵⁾。ピューリタンの説教にはジェームズ一世賞賛は全くないが、これはピューリタンの説教であることを考慮に入ればすぐに理解できることである。なぜならピューリタンは絶対王制打倒を目指した革命を引き起こしているからである。彼らにとっては王は敵である。その王を火薬陰謀事件記念説教で賞賛しようとするればそれは彼らの理念に反することである。ピューリタンの相手はジェームズ一世ではなくチャールズ一世で、チャールズ一世は火薬陰謀事件には直接関係ないが、チャールズ一世同様絶対王権に執着したジェームズ一世を賞賛することはピューリタンには出来ない。Strickland の説教は火薬陰謀事件説教とは言え、その説教はこれまでの英国国教会派の説教とはその内容を著しく異にしていると言える。ということはピューリタン Strickland の説教は火薬陰謀事件を機に事件の首謀者、カトリック教徒ジェズイットを非難する説教ではないということである。ここで問題になるのは、ならば Strickland の説教の真の意図はどこにあるのかということである。火薬陰謀事件日の11月5日に行った Strickland の説教の真の意図は火薬陰謀事件糾弾以

外にあった。それは何か。この問題に答える前に我々は Strickland の説教が行われた11月5日以前のピューリタン革命の状況について知る必要がある。これを知って初めて Strickland の説教の真の意図が明かとなってくる。

3. 1644年11月5日の火薬陰謀事件説教の背景

チャールズ一世の恣意的な政治主導に端を發した内乱は王と議会との対立を深めていくことになるが、Strickland による火薬陰謀事件説教が行われた1644年11月5日までに内乱が始まって既に2年が経過し、国王軍と議会軍の対立も幾度となく繰り返され、一進一退の攻防が続いていた。特に1644年7月2日、ヨーク西方のマーストン・ムーア（Marston Moor）で両軍が内乱史上例を見ない大規模な戦いが行われた。この戦いはクロムウェルの活躍もあって議会軍の圧倒的な勝利に終わった。だが国王軍の司令官ルパート王子は逃走し、議会軍は北部イギリスでの支配権を掌握したものの一抹の不安を残す結果ともなった。一応議会軍が勝利を納めた形で終わったマーストン・ムーアの戦い後、それぞれの部隊は国王軍を追撃せず、結果としてこれが国王軍に再結集のチャンスを与えることになった。西部にいた議会軍総司令官エセックス伯はチャールズ一世の攻撃を受け、南西部のコーンウォールのロストウィシエル（Lostwithiel）で国王軍により包囲され、9月2日にエセックス伯はかろうじてプリマスへ脱出した。チャールズ一世はこの勝利によりロンドン進撃を決心し、議会軍は窮地に追いやられることになる。翌10月27日、コーンウォールでの勝利後引き揚げるチャールズ一世軍を議会軍がニューベリー（Newbury）で阻止しようとした。議会軍は国王軍の二倍の勢力を有しながらも指揮統一を欠き、司令官マンチェスター伯は追撃を主張したクロムウェルの要望にも耳を傾けず、国王軍を包囲しなからがも彼らへ決定的な攻撃を加えることをせず、国王軍のオックスフォードへの帰還をみすみす許す事態が発生した。いわゆる第二次ニューベリーの戦いである⁽⁶⁾。チャールズ一世の議会を無視した強引な政治主導に端を發した内乱が勃発して2年が経ち、議会軍は王との対立姿勢を明確にしていくなかで、内乱はまだ先行き不透明といった感が強かった。1644年10月27日の

ニューベリーの戦いでは国王軍に壊滅的打撃を与えるチャンスを見逃すこととなり、議会軍も動揺を隠せないでいた。いわゆるピューリタン革命はピューリタンがチャールズ一世の政治を批判し、神の下での平等観に基づき、国王打倒を目指して起こした革命である。革命が勃発してから両派は相譲らぬ戦いを繰り返し、どちらが勝利を収めるかはわからない状況だった。特に7月2日のマーストン・ムーアの戦いで議会軍は圧倒的な勝利を得ながらも国王軍を壊滅できず、9月2日のロストウィシエルの戦いでは逆に国王軍により敗北を喫し、10月27日のニューベリーの戦いではマーストン・ムーアの戦い同様の作戦ミスにより、国王軍を取り逃がすはめに至った。11月5日の火薬陰謀事件説教の前には議会軍は以上の戦いで思いのままに戦いを遂行できないでいた。むしろ議会軍は自らの理想の追求に確信が持てない状態であった。見逃してならないことは Strickland は説教でこれらの戦いに言及していることである。

Manifold deliverances, with many glorious Victories, have been given in, upon all which we may write (the King of Swedens Motto upon the Battle at Lipsich) *A Domino facta sunt ista*; my memory is not a sufficient Register (nor were it fit for me at present if I were able) to give you an account of particulars, they are so many; I will not therefore tell you of *Edg-hill, Newbury, York, &c.* which yet are to be accounted precious and lasting Monuments of *the Lords being with us*⁽⁷⁾.

ここに見られる Edg-hill は Edgehill の戦いで、これは1642年10月23日にウーオーリックシャーの Edgehill で行われた議会軍と国王軍との間の最初の戦いである。それはロンドン南下を目指す国王軍とそれを阻止する議会派軍との戦いであったが、両軍に大量の脱走兵が出たために勝敗はつかなかった。Newbury は議会軍と国王軍との戦いが二度行われた南イングランド中部バークシャーの年である、一回目の戦いは1643年9月20日、グロースターを解放してロンドンに帰る議会軍を国王軍が阻止しようとした戦いで、戦いの勝敗はつかなかったが、国王軍側に被害が大きく、国王軍はオックスフォードに撤退せざるをえなかった。第二次 Newbury の戦いは Strickland の説教の直前の1644年10月27日に

行われた。議会軍は国王軍の二倍の軍隊を有しながらも指揮官の戦術ミスのため国王軍の包囲した拠点も獲得できず、この戦いも最終的には勝敗はつかず、国王軍のオックスフォード帰還を阻止しえなかった。York は1644年7月17日に議会軍に包囲された国王軍は降伏し、議会軍は北部での勝利を得ることになった。Strickland はこれらの戦いは主が我々とともにいる貴重な永久的な記念碑と見なされるべきであると言うが、戦いのすべてが議会軍の勝利に終わってはいない。Strickland は Newbury にはもう一回言及している。脚注に“fight about Newbery” (Newbury が Newbery と書かれている) とあり、本文には以下の記述がある。

They [public favours] have been given us in a way above humane probabilities, and notwithstanding disadvantages: when the enemy hath had the advantage of place and multitude, in so much that they sometime triumphed over us before the victory: whereby it hath appeared that victory was given us by him to whom nothing is difficult.⁽⁸⁾

上記の記述が二回の Newbury の戦いのうちのいずれかに言及しているのかは定かではない。圧倒的な不利な状況にもかかわらず主によって勝利が与えられたようだと述べているが実際の二度の Newbury の戦いでは議会軍と国王軍との間で勝敗はつかなかった。このように Strickland は1644年11月5日以前の York, Edgehill, Newbury の議会軍と国王軍との戦いに言及していることから明かなように、Strickland の説教は革命時の両派の戦いが背景にあることが理解できる。しかしながら Strickland は説教を両派の戦いを詳細に述べるわけではない。Strickland は両派の戦いに言及するのはこの二箇所だけで、その後は両派の戦いを取り上げることはしない。ただ Strickland には議会軍と国王軍との主導権争いが全く説教に反映されていないというわけではない。数々の戦いを戦いながら未だ国王軍に勝利を取めることのできない議会軍を激励する説教を Strickland は行いたかったのである。11月5日の Strickland の火薬陰謀事件記念説教には少なからずの危機感があった。Strickland は火薬陰謀事件記念説教を

行うが、Strickland にとっては火薬陰謀事件よりも議会軍と国王軍の戦いにより興味があった。興味があったというより Strickland はピューリタン革命の先行きに不安を覚えていたことは疑いえない。ピューリタンは彼らの取った行動が正しいこと及びその行動は必ずや自分たちの勝利に終わることを説教家に確約してもらいたかったのである。それは火薬陰謀事件記念説教を行った Strickland に課せられた使命であった。それでは Strickland は革命の勝利の確信をどのように行っているか。以下 Strickland はいかにして直前の対国王軍との戦いを考慮に入れ、革命の勝利の確信を行っているかを論じていきたい。

4. God with us.

Strickland の説教直前のピューリタン革命の進捗状況は以上の通りであるが、Strickland の説教の真の目的は火薬陰謀事件日を借用して、ピューリタン革命を援護射撃することにあった。国王軍との数々の戦いで議会軍は勝利を収めることもあったが、相手に壊滅的な打撃を与えることは出来ず、戦いはまだ勝利の行方が不透明な状況にあった。そのような状況の中での Strickland の説教である。火薬陰謀事件説教でありながら、彼が事件をほとんど論じない理由は、火薬陰謀事件非難の説教に終始すればそれは単に事件の張本人カトリック教徒を批判し、ジェームズ一世を賞賛することになるからであった。それでは革命を援護することにはならない。国王軍との戦いを有利に進めることができないでいる議会軍にとっての打開策はカトリック教徒批判、ジェームズ一世賞賛ではない。Strickland がなすべきは議会軍には絶えず神の味方であることを同士に訴えることによって議会軍の士気を鼓舞し、国王軍との戦いに勝利できる確信を与えることである。だから Strickland は説教の冒頭に「詩篇」46章7節をあげたのである。Strickland の説教のタイトルは“IMMANUEL, OR THE CHURCH TRIUMPHING IN GOD WITH US”である。説教に選んだ聖書からの一節は「詩篇」46章7節の“The Lord of Hosts is with us, the God of Jacob is our refuge.”である。「万軍の主がわれらとともにおられる」はまさしく“Immanuel”の意味で、Strickland は説教で終始主を賛美し、主がピューリタンの味方となる

ことを専ら旧約聖書を基にして強調する。説教の意図はいついかなる時も主は我々を助けてくれることを聴衆に訴えることである。Strickland は次のように言う。

Our praising God for his being *with us* in a thanksgiving-day, may effectually admonish and prepare us to mourn after *Gods presence*, in a day of humiliation with more affectionatenesse⁽⁹⁾.

「感謝の日」とは火薬陰謀事件日のことであるが、事件が未遂に終わったのは神が存在していたからである。ところが時代が経つにしたがい、神への感謝の念が薄らいできた。ピューリタンは特にこの点にこだわり、自らの「へりくだり」によって新たに神へ敬虔な態度を示すことを訴えた。神への祈りが何をもたらしたか。それを Strickland は「歴代誌下」20章21節、22節のヨシャパテの神への祈りの例を挙げる。ユダの人々がモアブびと、アンモンびと、メウニびとからの来襲を受けた際に、ヨシャパテは全国民をエルサレムに集め、断食によって主への助けを祈った。それにより、敵は同士討ちを行い、全滅に至り、ユダの民はエレサレムに凱旋する。だから“praising God is a more refined and spirituall duties above Nature, and requires both puritie and strength of grace to be well performed⁽¹⁰⁾.” なのである。神への賛美は必ず人々への神の報いをもたらす。だから Strickland は聴衆（上院議員）に対して決して神への感謝の念を欠いてはならないことを繰り返すのである。神への感謝の念を欠いた場合はどうなるのか。その例として Strickland はヒゼキアを挙げる。ヒゼキアは病気のため死ぬところであったが、主は回復の約束をヒゼキアに与えた。それに対してヒゼキアは主に報いることをしなかったので主の怒りがヒゼキアとユダ及びエルサレムに降りかかろうとした。結局はヒゼキアは心の高ぶりを悔いてへりくだったので主の怒りが彼に降りかかることはなかった（「歴代誌下」32章25節）。Strickland の説教の意図は神が絶えず我々と共にいるということであり、神に対して謙虚なへりくだりの姿勢で祈りを行えば神は必ず我々に報いをもたらしてくれるということなのである。Strickland は説教の聴衆に対して神は絶えず

聴衆の傍らに居ることを説く。聴衆の上院議員のために神は「イギリスの大義」を弁護してくれる。この「イギリスの大義」とはピューリタン革命を指していることは言うまでもない。Strickland は旧約聖書からの神への祈りを持ち出し、最終的にはイギリスを論じることを忘れない。主がイスラエル人と共にいたように主はまたイギリス人と共に居ることを幾度となく Strickland は説教で説くのである。だから聖書の冒頭に挙げた「万軍の主はわれらとともに居る」はまさしく神がイギリス人と共に居ることをも意味しているのである。ここにはイギリス人はイスラエル人と同じ道を歩んでいるというイギリス人＝イスラエル人の考えが見られ、それはまたイギリス人は「神の民」であることをも意味する。イギリス人＝イスラエル人観はこの時期のピューリタン特有の考え方ではない。それは英国国教会派の説教家もしばしばその説教で使用していた考えである。イギリス人は1588年のスペインの無敵艦隊によるイギリス襲撃撃退と1605年の火薬陰謀事件の両事件は特にイギリスへの神の特別な慈悲の表れ以外の何ものでもなかったイギリス人と神との特殊な関係を示す事件であると見なしていた。神のイギリスへの特別な慈悲があればこそ国は存亡の危機を免れたのである。イギリス人はこれを確信して止まなかった。Strickland の「主はわれわれと共に居る」の背後にはこのようなイギリス人にとっての神の特殊な存在観があったことは確かである。ではその確信はどこから来るのか。それは神への祈り、賞賛である。このことを Strickland は本説教で幾度となく繰り返す。英国国教会説教家のように火薬陰謀事件の最大のターゲットであるジェームズ一世が事件から奇跡的に救出したのは神の特別な慈悲のお陰であるとは Strickland は言わない。英国国教会派説教家はジェームズ一世救出の背後に神の存在を認め、徹底して奇跡的に事件から逃れたジェームズ一世への賞賛と神への感謝を捧げる。しかし、ピューリタンの説教家たる Strickland はあえてそれを行わない。Strickland の説教は火薬陰謀事件におけるジェームズ一世賞賛と神への感謝ではない。「主はわれわれと共に居る」は説教直前の議会軍と国王軍との戦いを考えると、神への祈りは単なる祈り以上の意味を有していることは明かであろう。Strickland の関心はあくまでも議会軍ピューリタンと国王軍との戦いにある。議会軍は国王軍との戦いで思うように勝利を収められず、革

命の主導権を握られなかったことに対して焦燥感を隠せないでいた。何とか国王軍との戦いに勝利し、聖書に記された理想の社会の建設を実現したかった。Strickland の説教は直前の国王軍との戦いなしでは理解できない説教である。Strickland の意図は既に述べたように火薬陰謀事件ではなかった。それを行えば Strickland はピューリタンの信念に反する説教を行うことになる。それよりも Strickland の胸中にあったのは国王軍との戦いである。ピューリタンによる最初の火薬陰謀事件説教を1641年に行った Cornerius Burges は「祈り」と「断食」により神に対してへりくだりの態度を示すことによって神の援護を得ようとした⁽¹¹⁾。それと同様 Strickland もしきりに神への賞賛、祈りを強調することを忘れない。神への賞賛と祈りを行えば神は我々の訴えを聞いてくれるのである。それでは Strickland は説教に挙げた「詩篇」46章7節をどのように解釈しているか。次にこの点に論を移したい。

5. 「詩篇」46章7節 “The Lord of Hosts is with us, the God of Iacob is our refuge.” と Strickland

Strickland の説教が議会軍と国王軍との戦いにおいて議会軍を援護する説教である。「万軍の主はわれらと共におられる、ヤコブの神はわれらの避け所である」はそのまま1644年11月5日現在の議会軍にとっては激励の言葉となる。Strickland は「詩篇」46章7節を “a Psalme of praise”, “triumphall Song⁽¹²⁾” と呼び、そこでは教会は主を喜ぶと述べ、次のように言う。

However it is...a Psalme of praise, or triumphall Song, wherein the Church rejoyceth in the Lord, giving him not onely the praise of her experience for a deliverance received, but also the praise of her hope and confidence for the future, setting him up as a perpetuall and standing refuge to the Church in all succeeding generations, wherein shee shall be kept secure and unmoved⁽¹³⁾:

教会は主による救出への賛美だけでなく未来への教会の希望と確信への賛美を

与える。主を次の世代の教会への永続的な避難所としてかけ、結果として教会は安全で不動であると Strickland は言う。ここで重要なのは Strickland の説教では「教会」は単に教会を意味するだけでなくまた「議会軍」をも意味するということである。教会は主を賛美し、その報いとして教会は安全でいられる。これはまさしく説教以前の議会軍が国王軍に対して決定的な打撃を加えられなかったことに対する自戒と反省及び主への賛美から得られる将来への希望を託した解釈である。Strickland にとって最近の議会軍の低迷振りは神の言葉を現世において実現するには極めて疑わしい。Strickland は何とかして議会軍の躍進を期待しつつ、聴衆に対して檄を投げかけるのである。主への賛美、祈りから失敗はあり得ない。謙虚な姿勢で主に対して祈り続けること、それが議会軍にとっての現状打破の近道なのである。主に対する絶対的な信頼はピューリタンの大きな特徴であるが、その主への信頼感は旧約聖書から来る。「詩篇」46章の冒頭には「神はわれらの避け所また力である」とあり、神は「悩める時のいと近き助けである」。身近な存在である神は決して遅れることなく我々を助けてくれる。神への信頼感があれば現状の危機は克服できることを Strickland は強調する。この例として Strickland は教会（議会軍）の“late experience” に言及する。

This [that God is watchfull and always ready at the Churches right hand in the time of danger] the Church had late experience of, how easily he [God] could defeat her enemies when they rose up in greater rage and fury,...⁽¹⁴⁾

Strickland が言っている“late experience”が7月2日のマーストンの戦いか9月2日のロストウイシエルの戦いか10月27日のニューベリーの戦いのいずれを意味しているのかは定かではない。ただ「最近」とあるから10月27日のニューベリーの戦いを言っているのであろうが、その戦いでは両派の勝敗はつかなかった。むしろ議会軍は追撃できるチャンスを逸し、チャールズ一世を取り逃がすことになり、チャールズ一世はその後バースで戦闘を整え、結局議会軍はドニントン (Donnington) とベージング (Basing) の包囲を捨てて冬営地に撤退するこ

ととなったことを考えるとニューベリーの戦いは議会軍にとっては敗北の感が強かったと言える戦いであった。いずれにせよ Strickland は、議会軍と神との親密な関係からいずれは議会軍に勝利が得られるという確信をもたらす。彼の説教はこの議会軍と神との密接な関係の強調であり、神への絶対的な信頼である。Strickland は、「詩篇」46章7節を神は対立の時には我々を助け、危険の時は我々を守ってくれると解釈する。

That God, who by a Sovereigne power hath every creature at his command, is effectually with us by a speciall presence of his providence, whereby he will not onely ayd us in time of opposition, and defend us in time of danger, but fight for us, and destroy our enemies; And this he will not faile to doe for ever, because he is ingaged to us by an everlasting covenant of his own free grace⁽¹⁵⁾.

神は議会軍を永遠に助け、守り、議会軍のために戦い、敵を滅ぼしてくれるのも神の自由な恩寵の永遠な約束によって議会軍と契約しているからである。この言葉の背後にはピューリタンの選民意識がある。ピューリタンはいわば神から選ばれた「聖者」である。その「聖者」が戦いに敗れるはずはないというのが Strickland の主張である。だから Strickland は、「詩篇」46章7節から得る教訓として「敵との対立状態にある時に神は神の教会の側に立ち、敵に対しては神の民に加担する」を挙げるのである。この例証として Strickland は、「申命記」20章3-4節を挙げる。そこでは戦いに臨むイスラエルに対して気おくれせず、恐れることなく、慌てず驚いてはならない、なぜならば神がイスラエル人といつも共にしており、彼らの敵と戦い、彼らを救うと書かれている。神は絶えずイスラエル人を助けてくれ、彼らに勝利をもたらしてくれた。同じように神との特別な契約関係にあるイギリスのピューリタンも神の援護の下にあり、戦いに破れることは考えられない。「申命記」の記述はイスラエル人にだけあてはまる言葉ではない。それはまた、聖書の記述においてのみならず“mystery”においてもイスラエルを継承しているイギリスの教会、議会派軍にも適応できる。ここで Strickland は議会軍がイスラエルを継承するのは“mystery”と言いながら

もはっきりと議会軍はイスラエルを継承する神の民であることを強調する。Strickland は更に神を味方につけたダヴィデにも言及し、ダヴィデのゴリアテとの戦いでもダヴィデは神の助けを得たがゆえにゴリアテに勝利したと言う。Strickland によれば神が神の教会への味方は3つの事に表れる。それは(1)神は破壊的苦難のただ中にあっても破滅と残虐から神の教会と人々を擁護してくれる。これは「詩篇」124章1-3節で言及されている教会に対する異教徒の多くの反乱の際の神の対応に見られることで、ダヴィデは次のように言う。

If it had not been the Lord who was on our side, now may Israel say, if it had not been the Lord who was on our side, when men rose up against us, they had swallowed us up quick, when their wrath was kindled against us⁽¹⁶⁾.

「詩篇」に記されているの敵と危険は議会軍にも言えることであって、主が議会軍の味方に立たなかったならば議会軍は破滅に至ったであろう。議会軍にはダヴィデと同じ神の援護があり、これまで難局を乗り越えてきたのである。(2)神は教会の敵の陰謀と企てを取り除いてくれる。「詩篇」9章15-16節にある異教徒が自ら作った穴に陥り、自分で作ったわなに捕らえられる例は(2)の好例である。(3)神は逆境のときに助けに現れる。Strickland は「歴代志上」5章19-20節を例に挙げる。そこには二部族と半部族がアラブ族と戦ったとき、前者は戦いの最中に神に祈り、結果として主は彼らに味方し、アラブ族に勝利した記述がある。さらにはイスラエルがアマレク人と戦ったときにも祈りを通してイスラエルは神の援助を得た。このように Strickland はイスラエル人の神への祈りを通して彼らが神から助けを得たことを述べる。議会軍が国王軍との戦いにおいて決定的な勝利を取めることができず、革命の先行きは不透明な状況にあったが、Strickland は議会軍には必ずや神の援護があることを訴える。神を味方につければ勝利は疑問の余地はない。そのためには何をなすべきか。それは神への祈りなのである。祈りを通して、神へのへりくだりの姿勢を示すことにより、神の援護を得ることができる。その前例は旧約聖書に多く見られることであり、その逆の例も旧約聖書に記されている。議会軍の行動の模範を旧

約聖書に見出し、それによって Strickland は議会軍を援護しようとする。戦いに光明が差し込まないただ中では議会軍は何を信じて戦えばよいのか。ただ単なる兵士への鼓舞や武力の増強だけでは現状を打破する力はない。議会軍の主力であるピューリタンにとって最大の精神的な支援は聖書に他ならなかった。それも旧約聖書である。旧約聖書の記述を議会軍にあてはめ、議会軍が直面している危機的現状の突破を図らねばならない。Strickland はピューリタンである。その Strickland が説教のなかで強調したのはやはり旧約聖書であった。戦いが物理的な側面において敵と拮抗する場合、何が戦いを決定づけるか。それは戦いの大義と兵士の強靱な精神力であろう。その点においてピューリタンの兵士は国王軍の兵士よりも優れていた。国王軍は現状維持だけに執着し、議会軍を打ち破ることだけを考える。しかし、議会軍には絶対王制を打破し、民衆が主役の新しいイギリス国家の樹立という大きな大義があった。そのために Strickland は旧約聖書へ全面的に依存した。旧約聖書の記述がピューリタンの戦いに適応され、ピューリタンの行動の指針を旧約聖書に仰ぐ。いわば旧約聖書で行われたことがそのままピューリタン革命にも行われるとピューリタンは考えた。神の書たる旧約聖書に自らの行動の原型が見出される。ピューリタンは旧約聖書に書かれている通りに行動すれば結果は自ずから付随してくる。ピューリタンにとって旧約聖書以上に自らを鼓舞するものはない。神の援護があれば不可能なことはない。ピューリタンの未来は旧約聖書に書かれている。ピューリタン革命時にあれほどまでピューリタンが主として旧約聖書に固執した理由は明かであろう。Strickland は、聖書以外にも Herod という人物が兵士に語った Josephus の言葉を引用している。

Our cause is just, though we be weak and few; and where truth and justice is, there is God, & where God is, there is both multitude and fortitude⁽¹⁷⁾.

大義が正しく、真理と正義があるところには神がいると Josephus は言うが、神への祈りは Strickland にとってはまさしく真理と正義の表れである。神は教会の大義に関わり、教会の敵には神の敵として戦う。Strickland にとって議会派

軍が規範とすべきは旧約聖書におけるイスラエル人なのである。これを幾度となく Strickland は説教で力説する。たとえばダヴィデについて Strickland は以下のように言う。

...a *David-like piety in you, might have a like influence upon England at this day*⁽¹⁸⁾.

ダヴィデのような敬神とはダヴィデが契約の箱がいかに粗末に扱われているかを憂慮し、神のために神殿建設を意図したことを意味する。それがダヴィデ王国への神の好影響を及ぼし、結果として神はダヴィデ王朝の永続をダヴィデに約束してくれた。“this day”とは11月5日の火薬陰謀事件日のことであり、Strickland は言わんとすることは火薬陰謀事件のような凶悪な事件を起こすことないように神への敬虔なる姿勢が必要であるということである。ダヴィデのような敬神があれば火薬陰謀事件は起こりえなかった。Strickland の言葉はジェームズ一世期における軽佻な信心への批判ともなっている。この他にも Strickland は神への敬虔な態度を強調する。例えば主は我々のために戦ってくれたと言って Strickland は次のように言う。

Yea, so much have we seen of Gods going out with us alwayes into the field, that the enemy was never yet knowne to prevaile against us, but by our either treachery or negligence; God hath never been wanting to us, though we have been too much wanting to our selves⁽¹⁹⁾.

これは国王軍との戦いに言及した言葉であるが、ピューリタンと共に神は戦場に赴き、彼らに勝利をもたらしてくれたと言い、ピューリタンはたえず神と共にいたと Strickland 力強く述べる。ピューリタン革命は最終的にはピューリタンの勝利に終わるが、Strickland が説教を行った1644年時においては戦いの勝利の行方はまだ不透明であった。それゆえに勝利への確信に飢えていたピューリタンである。Strickland は徹底してピューリタンと神との密接な関係を強調するが、それもすべてはピューリタン革命に勝利したいがためである。ピュー

リタンにとって国王軍との戦いは決して破れるはずのない戦いである。その勝利の保証をもたらしてくれるのは神との一体感であった。だから人々は神の親切な行いと神のみわぎを賛美すべきなのである。

Such a throng of praises, and so great that they were unutterable, and therefore silent-praise...yet though our praises should be more then we can expresse, yet we should this day endeavour to expresse our praises unto God as much as we can...⁽²⁰⁾

「この日」とは11月5日であるが、この日、火薬陰謀事件日にできるだけ神への賛美を表す努力をすべきだと Strickland は言うが、その賛美はジェームズ一世への賛美ではない。国王軍との戦いに際してのピューリタンへの神の加護に対しての神への賛美なのである。我々は神への賛美を後世に永続化させることによって来るべき世代に「豊作」をもたらすことができる。「この日」の神への賛美は「この日」だけに留まらず、未来のイギリスに対して神が行うであろう「偉大な事柄」「輝かしい事」への賛美でもあるのだ。Strickland は議会軍が受けている神のすばらしい摂理は過去の先人たちの神への賛美の結果であると考え、今度は Strickland たちが後世への神の御業の成就を願いつつ、神への賛美を捧げるべきだというのである。国王軍との戦いはピューリタンが望むようには展開していない。しかし、そのような状況にあってこそ神へ賛美を捧げることがこれからのピューリタン革命に新しい展開をもたらし、ピューリタンを勝利へと導くかもしれない。確かにピューリタン革命は最終的にはピューリタンの勝利で終わることになるが、Strickland の神への賛美強調はピューリタン革命の行方を予言するような言葉となっている。しかし、国王軍との戦いを見ると、必ずしも戦いは議会軍に有利には展開しなかった。戦いの先行きは極めて不透明な状況を呈していた。行き詰まった戦いに対してピューリタンはいかなる態度で対処すべきか。これが Strickland にとっては大きな問題であった。Strickland はその問題をいかにして解決しようとしているのか。

6. “these sad times” と Strickland

Strickland の説教は火薬陰謀事件説教のはずであるが、既に述べたように Strickland は火薬陰謀事件にはほとんど言及しない。Strickland の胸中にあったのは議会軍ピューリタンと国王軍との戦いである。勝利の明かりが見えない国王軍との戦いのなかで議会軍に対していかにして勝利を確約するかが Strickland に課せられた大きな任務であった。Strickland はその確約を旧約聖書に基づいて行う。Strickland は、神がいるのになぜ我々には救いはないのか、という「士師記」6章13節を引用する。

If the Lord be with us, why then is all this befallen us? Why are we not delivered from the hands of the Midianites?

この一節は、イスラエル人が遊牧民ミデアン人から受けた略奪と圧迫から国を救ったギデオンに関する一節である。イスラエル人は主の前で悪を行ったので、7年間ミデアン人の手にあった。そのイスラエルの窮状に対するギデオンの主への訴えである。この一節は火薬陰謀事件に適應できるものである。それを火薬陰謀事件に適應すればギデオン→ジェームズ一世、ミデアン人→ジェズイットという図式ができあがるが、これをまたピューリタン革命に適應するとギデオン→議会軍、ミデアン人→国王軍となる。しかし後者の場合は議会軍は完全に国王軍に制圧されている印象を与えるので、議会軍には良い影響を及ぼさない。しかし、いずれにしても主が最後にはギデオンに救いの手を差し伸べ、ギデオンは奇跡的な勝利を得る。Strickland は、ギデオンが勝利を得るまで7年間もミデアン人の下で肉体的精神的な苦痛を味わったように、大きな成功を得るにはそのような苦痛を経ることが必要である。神が共にいることは即座の救出を意味しない。

Gods being with his Church is not presently a *Supersedeas* to afflictions: Christ may be in the Ship...and yet she may be covered with waves, so that the Disciples may be

in great feare of perishing by the storme: So though *God be in the midst of the Church, so that she shall not be moved*, Ps. 46.5. yet *she may be tryed as silver is tryed in the fire; she may be brought into the net, and afflictions may be layed upon her loynes*, Psal. 66.10,11⁽²¹⁾.

ここで Strickland は神が教会とともにいることが即苦しみを取り除いてくれることを意味しないと言う。神が教会の中にも教会は「銀が火の中で練られるように試され、網に引き入れられ、腰には重い荷が置かれる」のである。なぜ神は教会の味方をしながら教会を苦しませるのか。なぜ神は即座に苦しみにある者を救わないのか。これは国王軍との戦いを繰り返す議会軍にも言えることであるが、Strickland は「多くの神聖なる素晴らしい目的」のためであると言う⁽²²⁾。では、その目的とは何であるのか。Strickland は以下の4点を挙げる。(1)危険を意識したり苦悩を感じたりすることによって神による救出を快く迎え、救出者の手を認めるため。(2)価値のある人と下劣な人を分けるため。(3)人々をへりくだせ、教会に助けと救出の準備をさせるため。(4)教会で信仰と祈りを始めさせ、それによって神は人々によって征服されるのを喜び、神は人々への約束すべて行う。神が教会に苦しみを与えるのはそれによって教会が神と神の助けを高く評価するためである。教会の苦しみはまた真に教会を思う人とそうでない人を見分ける手助けともなる。真に教会を思う者は教会が苦しみにあっても決して教会を見捨てることはしない。教会の苦しみはイスラエル人のカナン到着までの苦難の歴史を見れば容易に理解できる。イスラエル人が40年もの間荒野を放浪したのも主はその過酷な放浪を通してイスラエル人を苦しませ、試み、その心に何があるかを見極めるためであった。言うなればイスラエル人は過酷な放浪を通して主への真なる信仰心を試されたのである。だから決して苦しみは無益ではない。苦しみがあってこそ神は人を助けてくれる。試練を通して人は神を見出す。教会は様々な苦難を体験するが、それによって教会はよりよい状態へと至る。

...though she [the Church] can be brought into varietie of calamities, sometimes into

the water, sometimes into the fire, yet she shall also be brought through them into a better condition, *through fire and through water into a weal-thy place*, Psal. 66.12. Gods presence shall both beare her up in troubles, and give her rest from troubles at length, as *Exod.33.14. it did to Israel*, and so make her to triumph for ever⁽²³⁾.

苦難に際し神は教会を支え、ついには教会は苦難から解放される。これはイスラエルが体験したことであるが、革命時の議会軍にも言えることである。更に Strickland は「歴代志下」15章2節を引用して次のように述べる。

The Lord is with you, while you be with him, and if you seek him, he will be found of you, but if you forsake him, he will forsake you⁽²⁴⁾.

苦しみの時にこそ人は神を求めるべきで、神を求めなければ神から見捨てられる。Strickland は終始苦しみをただ苦しみとして逃げるのではなく、苦しみを真正面から直視し、苦しみを踏み台にして更なる新しい自己発見に努めるべきであることを主張する。ピューリタンの説教の特徴の一つは説教による自己改革と行動を促すことであり、不信心な人生を改革することであるが、Strickland の主張はまさしく苦しみを通して自己変革を成し遂げることを訴えている点においてピューリタン説教の典型となっている。なぜ神は人を苦しみへ追いやるのかについての Strickland の主張は以上である。次に Strickland は我々はいかにして神を我々の側につかせておくべきかについて論ずる。

7. いかにして神を我々の味方にすべきか。

Strickland は神を味方にする方法として次の3点を挙げる⁽²⁵⁾。(1)崇拝と宗教において神を熱望すること。崇拝と宗教は神の心の近くにあるので神に信心深く、神の名誉を気遣えば神を大義や国のために引き入れることができる。要は神に対して信仰心を厚くすれば、神は我々を援助してくれる。たとえばダヴィデが契約の箱を大事に取り扱ったら神はイスラエルに恵みを与え、ダヴィデ王

朝が永久に変わらない保証を与えてくれた。(2)契約を行うこと。この契約は神との契約で、契約の無視は神に怒りをもたらす。ヒゼキアは彼とバビロン王との契約を破ったがために主は彼をバビロンで死なせた。これに反しヨシヤは神の前で契約を立て、律法に従うことを誓い、イスラエル人のすべての人々を主に仕えさせた。その結果が31年間の王国の治世をもたらした。ところがイギリスにおいては契約は無視され、契約を立てることを拒否したりする者が多く、契約を立ててもそれを守ろうとしない者が多いと Strickland は言うが^{s(26)}、これはピューリタン革命時における議会軍の意志の統一不足を示唆し、合わせて議会軍が国王軍との戦いのなかで議会軍が期待通りに勝利を得ることが出来ないことへの Strickland の不満でもあろう。国王軍との戦いではピューリタンがより「聖者」としての自覚があれば戦いに負けるはずはないという Strickland の強い信念の表れである。(3)正義を行うこと。正義を行った人物の一人として Strickland はピネハス (Phinehas) を挙げている。彼が行った正義とはイスラエル人が異教の神々や女性と交わるようになったことへの正義である。主はイスラエル人の行為に立腹し、彼らを滅亡させようと疫病を流行させ、異教の崇拜者全員を殺すように命じた。そのとき一人のイスラエル人が異教の女性を連れて天幕に入って行ったのを見たピネハスは正義心にかられ主の命令を実行し、その二人を殺害した。そのため疫病の流行は治まった。「民数記」22章3節) この他にも Strickland は正義を行った人が一人でもイスラエルにいたら主はイスラエルを許したであろう(「エレミア書」5章1節)とかダヴィデがギベオン人に彼らを滅ぼそうとした人の子孫7人をギベオン人に引き渡したこと(「サムエル記下」21章4節)を正義の実行の例として挙げている。逆に正義の実行を怠った例にも Strickland は言及する(「エレミア書」48章10節、「列王記」20章42節)。Strickland はイギリスに言及して次のように言っている。

By this [Execute Judgement] Phinehas turned away wrath from *Israel*; and who can tell what you may do for *England*, if you be not wanting in this [execution of judgement]?⁽²⁷⁾

ピネハスについては既に言及したが、興味深いのは正義の実行を欠いていなければイギリスのために何できるかと説教の聴衆に疑問を投じていることである。Strickland は議会軍と国王軍との戦いは正義をめぐる戦いであることを示唆しているのである。つまりピューリタン革命は正義の実行であり、その正義を実行するのはピューリタンなのである。Strickland は正義の実行は神の成す業 (the Lords work) であると言うが⁽²⁸⁾、まさしく議会軍と国王軍との戦いは「神の成す業」であり、ピューリタンにとって敗北はありえない戦いである。Strickland は更に「破壊する者たちへ正義を訴える」と言うが、ここでの「破壊する者たち」は国王軍を指している。更に続けて Strickland は次のように言う。

Revive therefore (noble Patriots) those good Lawes which we have received from our fathers, and honorably put them in execution upon those that would subvert them, and so deprive us of our birth-right⁽²⁹⁾.

この一節も議会軍と国王軍との戦いを念頭に入れた言葉である。議会軍を率いるチャールズ一世は国会を開会せず、国家の法を無視した専制政治を行っている。良き法を破壊する人たちの筆頭はチャールズ一世であり、チャールズ一世は生得権をすらすら奪うとさえ言っている。そのような人たちが正義を実行しているはずはない。正義の実行はピューリタンにある。法を無視するチャールズ一世と異なり、もしピューリタンが有効な法の維持に熱心であることがわかれば、人々は上院議員に従い、それによって“this (miserably wasted) Kingdome⁽³⁰⁾”が幸福になる。内乱を繰り返すイギリスは「悲惨なまでに衰弱した王国」である。王国を衰弱させたのはチャールズ一世の専制政治である。ピューリタン革命は法治国家としてのイギリスを再びチャールズ一世から取り戻す革命でもある。それには国王軍との戦いに勝利する必要があるが、これまで見てきたように、神は絶えずピューリタンの味方をしている。火薬陰謀事件説教でありながら Strickland はチャールズ一世を批判し、正義を踏みにじる恣意的な暴政から正義にみちた国家の樹立こそが国王軍との戦いの最終的な目標であること力説する。Strickland はこれまで旧約聖書を基にして説教を進めてきたが、珍

しく新約聖書からの引用によって次のように述べる。

Remember for what end the Lord put the sword of justice into your hands, even to execute wrath upon them that doe evill, and for the good of them that doe well, Rom. 12. 3,4.⁽³¹⁾

なぜ主は正義の刃をピューリタンの手に置いたのか。それは悪事を行う者たちに怒りを浴びせ、良き行いを行う者たちのためである。ここで「悪事を行う者たち」はチャールズ一世側であり、「良き行いを行う者たち」はピューリタンである。いずれにせよ正義の刃を振るうのはピューリタンであり、その刃を受けるのはチャールズ一世である。このように Strickland の説教はピューリタン革命時における議会軍と国王軍を念頭に置いており、議会軍は神の正義を行うために国王軍と戦っているのだと言う。Strickland は、ピューリタンを“the gods of the earth⁽³²⁾”と呼び、「聖者」としてピューリタンに呼びかける。ところが Strickland は、神がピューリタンには存在していないことはこの日の誠実なイギリス人の心の悲しみであるとも言い、ピューリタンの神への熱望が希薄化していることに不満を表明している。それでも神は不在でなく、神は一人一人の中において、正義の実行に際してはすべての協議を決定するとも言う。ピューリタンの正義の実行はいわば神による神聖な実行であり、いかなる者もそれに異を唱えることはできない。Strickland は、ピューリタンと神との密接な関係を主張し、ピューリタンには神の援護があることを訴える。神の援護と言えどチャールズ一世も王は神の地上における代理人であるという父ジェームズ一世の王権神授説に固執した。しかし、その王権神授説は絶体王権擁護のための説で、それは王の恣意的な権力を是認し、国民を服従させるための権力であった。ピューリタンも神との間には密接な関係があり、彼らの行動はすべて神による援護を受け、神が彼らの背後には絶えずあることを確信している。これがピューリタンをしてあれほどまでピューリタン革命へのエネルギーを抱かせたそもその理由であろう。ピューリタンと神との関係は絶体王権の下のチャールズとは異なり、神の前での平等な社会樹立のための関係であった。一方は

王、貴族、平民から成るヒエラルキー存続、status quo 維持のための王権であり、他方はそのヒエラルキー破壊のために神との関係を強調する。チャールズ一世の王権神授説はいわば王だけにしか通用しないものであるが、ピューリタンの場合すべてのピューリタンは「聖者」であり、ピューリタン革命は一人の神の代理人と無数の「聖者」との戦いで、その意味では両派の決戦の行方は当初は一進一退であったがすでに決着がついていた戦いでもあった。

8. “Gods presence with us” とピューリタン革命

Strickland の説教は火薬陰謀事件記念説教であるが、すでに論じたように従来の火薬陰謀事件説教の説教方法に従っていない。火薬陰謀事件への言及もほとんどなく、事件そのものを論じることもしない。11月5日という火薬陰謀事件記念日における説教でありながら、事件を取り上げることもせず、事件を起こしたジェズイットへの批判もない。一体、Strickland の説教の真の狙いはどこにあるのか、という疑問が生じてくる。これはピューリタン革命という議会軍と国王軍との主導権争いを背景にして考えると容易に理解できることは既に指摘した。Strickland は説教の後半で説教の背景にはピューリタン革命があり、聖書を盾に議会軍を援護していることが理解できる。ここでは Strickland がいかにして議会軍を援護しているか、いかにして最終的に戦いは議会軍の勝利に終わることを Strickland は論じているかについて述べたい。

Strickland にとって1644年に至るピューリタン革命の時代は「落胆の時代」(discouraging times)⁽³³⁾である。これは議会軍と国王軍との戦いが議会軍にとって期待するほどの好結果をもたらさないことへの言及である。国王軍からの攻勢は強く、議会軍の精神的動揺は多く、しかも神による救出は遅々としているというのが議会軍を取り巻く現状であった。この行き詰まった現状をいかにして打開していくかがピューリタンにとっては革命の将来を左右する大きな問題であった。Strickland はその問題をいかにして解消しているのか。それは神が教会と共にあるというレトリックによっている。Strickland は今日のイギリスの実状はユダヤ人の悲惨な状態によく似ていると言い、「エレミア書」8章15節

からの次の一節に言及する。

We looked for peace, but no good came, and for time of health, and behold trouble⁽³⁴⁾.

ここではイスラエルの腐敗した宗教に対する主のイスラエル滅亡計画に触れているのだが、偽預言者が平和を望んでも良いことは生じず、癒される時を望んでも来るのは恐怖だけであるという主から見放されたイスラエル人の窮状が描かれている。イスラエルは神によって選ばれ、預言者によって教育を受けてきたが、いまや主への真摯な態度は消え、偽預言者が暗躍する時代となっている。この「エレミア書」がイギリスの現状と似ていると Strickland は言うが、それはやはりこれまでの議会軍の国王軍との戦いを念頭に入れての発言なのである。イスラエル人の腐敗した宗教心はピューリタンの神への信仰の弱体化に言及している。だから国王軍との戦いを繰り返しても、良い結果は得られず、彼らを待ち受けているのは「災難」だけである。イスラエル人の場合はエレミアの嘆きであるがピューリタンの場合は Strickland の嘆きである。それでも Strickland は希望を失わない。

...such a battle will bring things toward an issue; such a man, and such an army will give a good stroke to the businesse; by such and such a time, wee shall see what will become of things; this yeere, and that Summer, we hope will put an end to all....⁽³⁵⁾

“such a battle” が事態に決着をつけるとか “such a man, and such an army” が国王軍との戦いに議会軍にとって有利な一撃をあたえるとか “by such and such a time” とか Strickland は言うが、具体的な戦い、人物、軍隊、時を明示することはない。しかし、これらの表現から Strickland の説教がいかに議会軍と国王軍との戦いに関心を抱いているかが容易に理解できる。「今年」そして「あの夏」にはすべてが終わることを願うと Strickland は言うが、「今年」は1644年であるが、「あの夏」とはいつの夏か。いずれにせよ Strickland は国王軍との戦いに決着のつく日は遠くないとの見通しを述べている。もちろん国王軍との戦いが議会軍

の勝利に終わることを聴衆に確約しているのであるが、それはあくまでも Strickland 個人の確約で、国王軍との戦いがどうなるかは誰にも予想できない。しかし、説教で Strickland は弱音を吐くことは許されない。今のところ戦いは五分五分であるが、勝利は我らにありと Strickland は自信を持って聴衆に訴えるのである。11月5日の火薬陰謀事件日であるが、Strickland は議会軍と国王軍との戦いにおいて火薬陰謀事件において神の慈悲のお陰で事件が未然に防がれたように、国王軍との戦いでも神は議会軍に慈悲を示し、戦いは議会軍の勝利に終わることを宣言するのである。しかし現状は Strickland を初め議会軍にとっては厳しい。そこで Strickland が聖書の様々な事例から得た「教訓」(doctrine)は“Gods presence with the Church makes her for ever invincible.”である。この教訓が Strickland の説教のタイトル“Immanuel”の一部であることは、Strickland の説教の意図がどこにあるかを示している。神は絶えず教会と共にいるというのが Strickland の根本的な考えなのである。この神の援護を受けると教会はいかなる難局をも乗り越えることができる。だから Strickland は、神は滞ることはあっても必ずややってくると「ハバクク書」からの一節を上げるのである。

At the end it [God's will] shall speak, and not lie; though it tarry, wait for it, because it will surely come, it will not tarry⁽³⁶⁾.

「侮辱的な敵」⁽³⁷⁾による教会の衰退の「現在の治療法」⁽³⁸⁾として“Fear not, for I will be with thee [Jacob].”⁽³⁹⁾が教会を最も鼓舞する言葉となる。ダヴィデが神への全幅的な信頼を寄せたときにダヴィデはあらゆる恐怖を克服し、神に対抗するどんな人間をも恐れることは理不尽なことであると考えた。Strickland はさらに言葉を続けて神が我々とともにいるときに他の人間に恐怖を抱くことは神を軽視することであるとも言うが⁽⁴⁰⁾、「他の人間」とはこの場合国王軍を指している。神が我々と共にいるから国王軍を恐れる必要はなく、敵の大群や勢力に恐怖を抱く必要はない。

...God may at once both shame and encourage our fearfull hearts, when they are too much apaled at the multitude or strength of enemies,...⁽⁴¹⁾

「敵の大群や勢力」とは言うまでもなく国王軍のことであるが、国王軍を前にして恐怖におびえる議会軍を神は赤面させたり激励したりする。Stricklandにとってあくまでも戦いの背後には神がいる。「民数記」には議会軍と同じ恐怖に襲われたイスラエル人がいる。それはカナン土地に入る前に斥候によりカナンの現状を告げられた時であるが、カナンの住民は手強い住民でしかもカナンは高い城壁で囲まれている。それに対してイスラエル人は“carnall feares”⁽⁴²⁾に取りつかれ、カナン征服を躊躇した。そのようなイスラエル人に対して二人の斥候 Caleb と Joshua はイスラエル人の神との密接な関係から恐れるものは何もないとイスラエル人を激励する。

Only rebell not ye against the Lord, neither feare ye the people of the land, for they are bread for us, their defence is departed from them, and the Lord is with us; feare them not.⁽⁴³⁾

これは「民数記」14節9章からの一節であるが、イスラエル人にとってカナン定住は主からの命令であり、いかにカナンが難攻不落であろうが、カナン定住はいわば主の意志の実現に他ならない。だからイスラエル人から見ればカナン人は“bread”にすぎない。主はイスラエル人とともにいるので恐れる者はないのである。カナン征服を目の前にしたイスラエル人の心境はちょうど国王軍と戦う議会軍の心境である。イスラエル人は議会軍となり、カナン人が国王軍となる。イスラエル人のカナン定住の背後に主がいたと同じように、議会軍も主と共にいる。だから国王軍との戦いで議会軍が敗れるはずはないのである。神の存在は現在の危険に対する教会にとっては「盾」である。

...as Gods presence is a Shield and Buckler to the Church against present danger, whereby our liberties, lives, and religion (which have been, and still are at stake) are

preserved, and the Kingdome not given up to desolation; so is it a pledge of perpetuall safety, the Church shall not need to fear that ever her enemies shall overcome, and lay her waste, it makes her for ever invincible:⁽⁴⁴⁾

「教会」とは単なる教会ではなく、Stricklandは終始議会軍の意味をも含ませていることは疑いの余地はない。「現在の危険」とは国王軍との戦いである。神の存在によってピューリタンの自由、生命、宗教は守られ、イギリス人が破壊に至ることはない。神の存在は永遠なる安全を約束してくれるものであり、教会は敵の征服を恐れる必要はない。神の存在は教会を永遠に勝利を与えることになる。旧約聖書に神の存在の前例を見れば、それは「ヨシユア記」1章5節の主はヨシユアを見放すことも見捨てることもしないという言葉や「出エジプト記」のイスラエル人が神と共にいたからエジプト人は追い散らされ、彼らは逃げるのが最善だと思ったという言葉に見出される。これらのStricklandの言葉はピューリタン革命抜きにしては考えられない言葉である。さらにStricklandは言葉を続けて神の存在は教会が受けるあらゆる公の慈悲を永遠の慈悲とし、ピューリタンの救出を永遠の救出とし、ピューリタンの勝利を永遠の勝利とするという。ここで注目すべきは「神の存在がピューリタンの救出を永遠の救出とする」である。この救出は“deliverance”である。“deliverance”なる語は従来の英国国教会説教家による火薬陰謀事件説教ではジェームズ一世の事件からの「救出」である。彼らは“deliverance”をもっぱらその意味で使用していた。ところがStricklandは“deliverance”をピューリタンの国王軍との戦いからのピューリタンの「救出」の意味で使用している。この場合の「救出」はピューリタンの苦境からの救出を意味し、広く言えばそれは「勝利」を意味する語と考えてもよいだろう。つまり火薬陰謀事件説教で本来英国国教会説教家がジェームズ一世の事件からの神による救出を賞賛しているのに反し、Stricklandはピューリタンと国王軍との戦いの苦境からのピューリタンの救出の意味で使っているのである。国王軍は「イギリスの教会から尊い特権を奪う人たちであり」、彼らはイギリスの教会の敵と結論づけねばならない⁽⁴⁵⁾。また、Stricklandは、国王軍は「偶像」と「偶像崇拜」に従い、真の神を追い払っていると言うが⁽⁴⁶⁾ここで

の偶像崇拜者が国王軍を指していることは言うまでもない。ここにピューリタン説教家としてのStricklandの姿がはっきりと現れていると言えよう。Stricklandにとってジェームズ一世は眼中にはない。眼下の敵、国王軍をいかにして撃退し、ピューリタン革命を成功に導くことがStricklandにとっての最大の使命となる。そのためにStricklandはわざわざ上院での説教を要請されたのである。ピューリタンにとって国王軍との戦いは必ずや勝利することになっている。教会が一時残虐な人々のもとで苦しむことがあってもそれはほんのわずかな間でしかないと言いが^{s(47)}、「残虐な人々」とは言うまでもなく国王軍である。「残虐な人々」が議会軍に対して優勢であろうともそれは長くは続かない。議会軍は必ずや「残虐な人々」を打破する。それも教会には神の存在があるからである。あらゆる困難は神の存在によって克服できるのである。

むすび

Stricklandが説教に選んだ「詩篇」46章7節についてStricklandはその意味を次のように解釈する。

That God, who by a Sovereigne power hath every creature at his command, is effecutally with us by a speciall presence of his providence, whereby he will not onely ayd us in time of opposition, and defend us in time of of danger, but fight for us, and destroy our enemies; And this he will not faile to doe for ever, because he is ingaged to us by an everlasting covenant of his own free grace.⁽⁴⁸⁾

すべての被造物を掌中に収める神は摂理によって国王軍との対立の時にはピューリタンを助け、危険なときにはピューリタンを守ってくれるだけでなくピューリタンのために戦い、敵を滅ぼしてくれる。この解釈は議会軍と国王軍との戦いにおいて議会軍を援護する力強い言葉となる。“opposition”とはチャールズ一世の国王軍との対立であり、“enemies”とは言うまでもなく国王

軍である。それゆえ Strickland の説教は単なる聖書の一節に関する説教ではなく、それは1644年11月5日までにピューリタンが苦戦を強いられていた国王軍との戦いとその背景にあった説教であった。ソールズベリーからわざわざ上院での説教を依頼された Strickland は自分がなすべきことをはっきりと理解していた。1644年は内乱が勃発してわずか2年しか経過しておらず、議会軍と国王軍との間に重要な戦いが繰り返された年でもあった。7月のマーストン・ムーアの戦い、8月から9月にかけてのロストウィシエルの戦い、10月のニューベリーの戦い、と盾続きに国王軍との戦いが繰り返された。いずれの戦いにおいて議会軍も国王軍も決定的な勝利を収めることができず、特に「聖者」として神の戦いと自負していた議会軍は動揺の色を隠すことはできなかった。そのような中での Strickland の説教である。11月5日はジェームズ一世の暗殺を狙ったジェズイットによる火薬陰謀事件が起こった日である。従来の英国国教会説教家による記念説教では説教の中心はジェームズ一世であった。ところが Strickland は火薬陰謀事件にはほとんど触れず、ジェームズ一世については全く取り上げもしない。なぜ Strickland がジェームズ一世に言及しなかったかについては既に論じたが、反王権を訴えるピューリタンにとってジェームズ一世賞賛はありえないことであった。Strickland の説教の中心は国王軍との戦いで苦戦を強いられていた議会軍をいかにして鼓舞するかであった。そのために Strickland が依拠したのは聖書、それも旧約聖書であった。ピューリタン信仰の基本は「聖書のみ」「信仰のみ」「万人祭司」である。Davies はピューリタンの“Bible-centered spirituality”を指摘するが⁽⁴⁹⁾、それはこれまで論じてきたことから容易に理解できよう。「聖書のみ」(sola Scriptura)は、聖書が唯一の最終的な権威であることを示すが、Strickland の説教はまさしく「聖書のみ」に基づいている。この点英国国教会説教家の教父や古典の作品からの援護による説教とは異なる点である。Strickland は、「詩篇」46章7節の「万軍の主はわれらと共におられる。ヤコブの主はわれらの避け所である。」から説教を始めるが、説教の随所で主として他の旧約聖書を基に神とピューリタンとの特別な関係を説き、神はピューリタンの味方であることを繰り返し続ける。革命時ピューリタンは膨大な説教を行い、聖書から革命を支持した。ピューリタンの説教は“the

disease of our Age”であると言う者もいるが⁽⁵⁰⁾、Stricklandの説教もピューリタンの膨大な説教の一部をなすことになる説教である。神の援護の下での国王軍との戦いでピューリタンは敗れるはずはありえないことを強調する Stricklandの説教に対してピューリタンがどのような反応を示したかは知る由もない。しかし、1644年11月5日以降ピューリタンは幾多の難局を乗り越え最終的にはピューリタンの勝利で終わることになり、Stricklandの説教はその勝利に貢献した説教でもあったことは確かである。

Strickland が火薬陰謀事件説教を行った1644年11月5日は4編の火薬陰謀事件説教が行われているが、本論では Strickland の説教だけを取り上げ、説教と革命時の国王軍との戦いとに関連で Strickland の説教の意義を論じた。Strickland 以外の3編の説教のなかで William Spurstowe の説教は Strickland の説教とは切り話せない説教である。なぜかと言えば Strickland は本説教のなかで Spurstowe の説教は午前中に行われたと書いているからである⁽⁵¹⁾。Strickland が Spurstowe の説教を直接聞いたのかは想像の域を超えないが、これは興味ある事実である。本論では Spurstowe と Strickland の説教の関連性については論じることはできなかったが、この問題については校を改めて論じたい。

注

- (1) John Strickland: *IMMANUEL, OR THE CHURCH TRIUMPHING IN GOD WITH US. A Sermon preached before the Right Honourable of Lords, in the Abbey of Westminster; at their publique Thanks-giving, November 5th 1644* (London, 1644), p. 15.
- (2) Strickland, p. 16.
- (3) Strickland, pp. 15-16.
- (4) Strickland, p. 36.
- (5) King James I: *Triplici Nodo, Triplex Cuneus, or an Apology for the Oath of Allegiance in The Political Works of James I* ed. C.H.McIlwain (New York: Russell & Russell, 1965), p. 281.
- (6) 1644年の議会軍と国王軍との戦いについては以下を参照した。Martyyn Bennett:

The Civil Wars in Britain & Ireland 1638-1651 (Oxford: Blackwell, 1997), P.R. Newman: *Atlas of the English Civil War* (London and New York: Routledge, 1998), Martyn Bennett: *Historical Dictionary of the British and Irish Civil Wars 1637-1660* (Chicago: Fitzroy Dearborn Publishers, 2000), Walter Money: *The First and Second Battles of Newbury and the Siege of Donnington Castle During the English Civil War* (Nottingham: Oakpast Ltd., 2009).

- (7) Strickland, p. 16.
- (8) Strickland, p. 19.
- (9) Strickland, The Epistle Dedicatory.
- (10) Strickland, The Epistle Dedicatory.
- (11) 人文科学研究第125輯 (2009), pp. 15-49参照。
- (12) Strickland, p. 2.
- (13) Strickland, p. 2.
- (14) Strickland, p. 2.
- (15) Strickland, p. 7.
- (16) Strickland, p. 16.
- (17) Strickland, p. 17.
- (18) Strickland, p. 25.
- (19) Strickland, p. 19.
- (20) Strickland, p. 20.
- (21) Strickland, p. 21.
- (22) Strickland, p. 21.
- (23) Strickland, p. 29.
- (24) Strickland, p. 23.
- (25) Strickland, p. 27.
- (26) Strickland, p. 26.
- (27) Strickland, p. 26.
- (28) Strickland, p. 26.
- (29) Strickland, pp. 26-27.
- (30) Strickland, p. 27.
- (31) Strickland, p. 27.
- (32) Strickland, p. 27.

- ③ Strickland, p. 35.
 ④ Strickland, p. 36.
 ⑤ Strickland, p. 36.
 ⑥ Strickland, p. 36.
 ⑦ Strickland, p. 36.
 ⑧ Strickland, p. 37.
 ⑨ Strickland, p. 37.
 ⑩ Strickland, p. 37.
 ⑪ Strickland, p. 37.
 ⑫ Strickland, p. 37.
 ⑬ Strickland, p. 37.
 ⑭ Strickland, p. 38.
 ⑮ Strickland, p. 32.
 ⑯ Strickland, p. 32.
 ⑰ Strickland, p. 38.
 ⑱ Strickland, p. 7.
 ⑲ Horton Davies: *Worship and Theology in England from Cranmer to Hooker 1534-1603* I (Princeton: Princeton University Press, 1970), p. 301. 本書の3章は“Puritan Preaching”で教えられるところが多い。
 ⑳ Pete Lake, “Avan-Garde Conformity” in Linda Levy Peck ed. *The Mental World of the Jacobean Court* (Cambridge: Cambridge University Press, 1991), pp. 113-133.
 ㉑ Strickland, p. 15.

References

- Paul Christianson, *Reformers and Babylon: English Apocalyptic Visions from the Reformation to the Eve of the Civil War* (Toronto: University of Toronto Press, 1971)
 Godfrey Davies, M. A., *The Early Stuarts* (Oxford: At the Clarendon Press, 1937)
 William Haller, *Liberty and Reformation in the Puritan Revolution* (New York and London: Columbia University Press, 1963)
 Christopher Hill, *The English Bible and the Seventeenth Century Revolution* (London:

- Penguin, 1993)
- J. Sears McGee, *The Godly Man in Stuart England* (New Haven and London: Yale University Press, 1976)
- Thomas Stephen Nowark, "Remember, Remember, The Fifth of November": Anglocentrism and Anti-Catholicism in the English Gunpowder Sermons, 1605-1651 (Ph.D. Dissertation, State University of New York at Stony, 1992)
- Paul S. Seaver, *The Puritan Lectureship: The Politics of Religious Dissent* (Stanford: Stanford University Press, 1970)
- Tai Liu, *Discord in Zion: The Puritan Divines and the Puritan Revolution 1640-1660* (The Hague: Martinus Nijhoff, 1973)
- Hugh Trevor-Roper, *The Crisis of the Seventeenth Century: Religion, the Reformation, and Social Change* (Indianapolis: Liberty Fund, 1967)
- John F. Wilson, *Pulpit in Parliament* (New Jersey: Princeton University Press)
- David Zaret, *The Heavenly Contract* (Chicago: University of Chicago Press, 1985)
- 『旧約聖書』(東京:日本聖書教協会, 1962年)
- 『旧約聖書略解』(東京:日本基督教団出版局, 1975年)
- ジョン・ドレイトン 池田康文・池田曜子訳『総覧・図説 旧約聖書大全』(東京:講談社, 2003年)
- ジョアン・コメイ 関谷定夫監訳『旧約聖書人名辞典』(東京:東洋書林, 1996年)
- ロナルド・ブラウンリング 別宮貞徳監訳『新約聖書人名辞典』(東京:東洋書林, 1995年)
- 松村赳・富田虎男編『英米史辞典』(東京:研究社, 2000年)
- 旧約・新約聖書大事典編集委員会『旧約・新約聖書大事典』(東京:教文館, 1989年)
- W. H. ウィリアム 加藤常昭監訳『世界説教・説教学事典』(東京:日本基督教団出版局, 1999年)